

平成二十五年度 入学試験問題

国語

第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

われわれの人間関係というのは、ふしぎなものだ。はじめは、まったく互いに知らん顔をしていた人間同士が、⁽¹⁾つきあいが深くなると、ほとんど一身体のような親密さをもつようになってしまう。これはいったいどういうわけなのであろうか。

「勿頸の交わり」ということばがある。首を切られても悔いの残らないような親しい友人関係のことだ。それほどにまで、人間は親密になれる。A、イヌやネコは、そんなに深いまじわりをもつことはできない。人間関係ということばがあるのだから、いちおう、イヌ関係、ネコ関係というのも想定することはできようが、どうも、イヌやネコの関係と人間関係とのあいだには大きなひらきがあるように思える。

なぜ、このひらきができてくるのか。それは人間が「ことば」を使う唯一の動物であるということとたぶん関係している。われわれが互いに親しくつきあえるのは、ことばを使うことができるからなのである。

ことばというのは、考えれば考えるほど巧妙な、人間の発明品である。ことばを使うと、われわれは、わかりあうことができるのである。ことばの使用をぬきにして、人間関係を論じることは不可能だ。人間関係とは、ことばを通じての関係ということである。そのことは、われわれの日常のものいい方のなかにも投影されている。ひとが「ことばをかける」「声をかける」というのは、人間関係をつくろうとしている、ということだ。「声もかけてくれない」「口もきかない」というのは、その「トウジシヤ」同士が人間関係をつくろうとしていない、ということだ。時と場合によっては、われわれは、ひとに「声をかけられる」だけでもうれしい。

ことばを使うことが、人間だけの特技であるかどうかについては疑問がないわけではない。動物学者たちは、トゲウオやカモメ、そしてさらには、人間にひじょうにちかいサル（イ）の群れなどを観察して、これら動物の世界で、人間のことばとたいへん似た過程がシンクウ（ア）しているという事実を発見している。そして、そのような発見についての報告を読めば読むほど、動物の「ことば」と人間の「ことば」のちがいは程度の差にすぎないのではないかと考えたこともなる。しかし、かりに程度の差であるとしても、人間の使っていることばと、動物のそれとのあいだには、大きな割れ目があるようだ。なぜなら、人間同士ことばを使うことによって、お互いに「わかる」こと

30

25

20

15

10

5

ができるからである。動物の社会にも、ことばに似た現象はあるが、人間がことばによって「わかる」とおなじような作用は、動物にはない。そこにあるのは、とりわけ下等動物になればなるほど特定の「刺戟にたいするほとんど本能的な反応のようなものであつて、人間同士のあいだにはたらく「理解」作用ではけつしてないのだ。

それではいったい、「わかる」というのはどういうことなのか。たぶん心理学者のいう共感という考え方が、この問題を考える場合、有力な手がかりのひとつになる。

B、お医者さんと患者との関係を考えてみよう。患者は、からだのある部分の痛みを訴えている。かれは医師に、その患部が「痛い」という。その「痛い」ということばをきいたとき、医師の内部ではひとつの過程が発生する。それは、患者が「痛い」ということばによって表現しているからだの状態に似た状態を、みずからの体験に即して想像する過程である。

医師みずからは、べつだんその部分に痛みを感じるわけなのではない。しかしかれは、患者が痛い、ということばによって表現しようとしているからだの状態がどのような性質のものであるかを知っているのである。

ひとりの人間の内部に発生している状態ときわめてよく似た状態がもうひとりの人間の内部に生ずる過程、それが共感である。C、それはしばしば、生理的な次元でも発生する。たとえば、前記の痛みの経験だが、

⁽⁴⁾母親と子どもといったこまやかな関係のなかでは、痛みはたんに想像上経験されるだけでなく、ジッサイの生理的な痛みとして体験されることがある。子どもが「痛い」というたんびに、母親もその部分がほんとうに痛くなったりするのだ。

もつと単純な(5)は、たとえば、乳離れしたばかりの幼児にものを食べさせたりするときの親子の、^(エ)ジョウケイを思いうかべてみればよくわかる。子どもにアーンと口をあけさせるとき、しぜんに親の口も、そんなふうにはひらかれてしまう。親が口をあけるから子どもがそれを模倣しているのだともみえるが、子どもが口をあけるのにつりこまれて、親が口をあけてしまふようにもみえる。そんな経験は、誰でももっているはずである。

親しい人間同士を形容して「ともに笑い、ともに泣く」という表現が使われるのは、このような共感能力と関係する。ある人間のよろこびがそのままもうひとりの人間のよろこびになる、というのは、ふたりの人間のあいだに高度の共感が成立するということだ。ひとの悲しい経験に「貫い泣き」

60

55

50

45

40

35

したり、面白い話に「釣りこまれ」たり、という表現は、すべて、人間同士のあいだではたらく共感のふしぎな作用をあらわしているといつてよい。

この共感作用は「同一化」ということばで記述される過程とかさなりあう。同一化とは、相手方の置かれている状況だの、相手方の内部で発生している状態だのと似た状況や状態を体験することだ。それは、われわれが小説を読んだり、映画を見たりするときのことを思い出してみたい。

たとえば、手に汗をにぎるような大活劇というのがある。映画館のスクリーンのうえで、ビルの屋根のうえをとんで渡ったり、スポーツ・カーで追跡をしたり、という活劇が展開している。それを見ているうちに、われわれはその活劇に釣りこまれる。スポーツ・カーが走りまわっている場面では、あたかも自分がその自動車を運転しているような気持ちになって、目のまえに突然ガケがあらわれたりするとハラハラしてしまう。ビルの屋上に追いつめられて、隣りのビルにとび移る場面では胸がドキドキする。まさしく「手に汗をにぎる」のである。そして、そのときのわれわれは、映画のなかの登場人物に自分自身を置きかえているとはいえないか。

小説を読んでいるときもそうだ。主人公の境遇だの、人生のセツケイの仕方だの、われわれは小説を読みすすめるにつれて、主人公の立場と自分を密着させてしまう。主人公が悲しければ、読者であるわれわれも悲しくなる。主人公がよろこばば、われわれもよろこぶ。われわれは主人公の「身になって」しまうのである。

共感、あるいは同一化がどんなふうにしてわれわれの内部で発生するかはよくわかっていない。しかし、われわれは事実の問題、あるいは体験の問題として、共感の現象があることを知っている。われわれは「相手の身になる」能力をもっているのである。

(加藤秀俊『人間関係』)

★刺戟：刺戟と同じ意味。

★活劇：格闘の場面を主とした演劇や映画。

問一

——(1)「つきあいが深くなると、ほとんど一身体のような親密さをもつようになってしまう。」とありますが、人間同士が親密になれるのはなぜですか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ことばを通じての関係を論じることで、ものの言い方の豊かさを生み出せるから。

イ ことばを通じての関係を論じることで、お互いに親密になることができるから。

ウ 人間同士ことばを使うことによって、人間関係を論じることができから。

エ 人間同士ことばを使うことによって、お互いに「わかる」ことができるから。

問二

——(2)「動物の『ことば』と人間のことばのちがいは程度の差にすぎないのではないか」という疑問に対して、筆者はどのように考えていますか。「動物の『ことば』」がどのようなものであるかを明らかにした上で、八十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問三

——(3)「わかる」というのはどういうことなのか。」とありますが、「わかる」とはどういうことだと筆者は考えていますか。六十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問四

——(4)「母親と子どもといったこまやかな関係」とは、どのような関係ですか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが母親に対して、生活上の細かい点まで心を配っている関係。

イ 子どもと母親との、厚い情によって深く心が結ばれている関係。

ウ 子どもが母親を慕う気持ちが、すみずみまで行き届いている関係。

エ 子どもと母親とが、細かい点まで互いに観察している関係。

問五

(5) に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 想像上の模倣
- イ 原始的模倣
- ウ 生理的共感
- エ 想像的共感

問六

A B C に入れるのにふさわしいものを次のア～ウの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば
- イ だが
- ウ そして

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 医師が、患者のからだの状態を理解できるのは、みずからの体験に即して痛みを想像することができからであり、想像力豊かな感性の高い医師は生理的な痛みを伴うこともある。
- イ 人がことばをかけたたり声をかけたたりするのは、人間の持つ本能的な反応であり、単なる知り合いの関係から、ことばを通じての豊かな人間関係を生み出すことを目標としている。
- ウ 小説を読んでいて主人公が悲しければわれわれも悲しくなったり、映画を見たときにハラハラして「手に汗をにぎる」のは登場人物に自分を置きかえる「同一化」と呼ばれる現象である。
- エ 共感能力の豊かな人は、たくさん人の「身になる」ことができ、そのため、多くの人から受け入れられ、ことばの使用を抜きにして、も豊かな人間関係を生み出すことができる。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

理央と遙は、大親友であった。ペットショップに鷹が売っていることを知り二人で見に行く。その帰り道、買ったばかりの赤い手袋の片方を理央に貸してくれた直後、交通事故で遙は亡くなってしまふ。前に進めなくなっていた理央は飛べない鷹を飼ひ、モコと名づけ、同級生の康太や舞子とともに飛行訓練に打ち込むようになる。

お風呂からあがって、手袋をはめる。眠るときも左手にだけ手袋をはめるのは、パジャマを着るように自然な行為だ。

理央は赤い手袋をじっと見つめた。あれ以来ずっと気になっている。龍安寺で会った八十歳くらいのおばあさん。もしかしたらあのおばあさんは、康太のお母さんが言っていた人かもしれないと思う。たしかめたわけではない。たしかめるのはこわい。

「でも、もしかしたら、そろそろ本当の持ち主のところに帰るころかもしれないね」

おばあさんの声が耳の奥でよみがえる。

やっぱり返さんといかんよね。

手袋は遥からの借りものだ。これまで何度か、家族に返さなければと思ったけれど、どうしても踏みきれずにいた。

理央は手袋をはずして、左手をながめてみる。湿り気を帯びて白っぽく、青い静脈が浮き上がっている。右手とくらべてみるとちがいは明らかだ。皮膚の色はぜんぜんちがうし、全体的に細い。ひとまわりくらい小さく見えた。骨折をして数週間ギプスで固めていた足が、日焼けもせず、筋肉が取れてほっそりしてしまうような感じだ。

細く白くなった左手はとても頼りない。けれど、すきとおってきれいな気もした。

理央ははずしたばかりの手袋を、やっぱりはめた。

つぎの日の放課後、理央は家に帰る前に遙の家に寄った。昨日の夜、手袋をはめたりはずしたりしながら、なんとか決心をつけた。

遙の家は、公園をはさんだ向かいのマンションだ。インターフォンを押すと、おばあさんが出た。たずねてきたのが理央だと知ると、うれしそうに

声ははずませた。

エレベーターが部屋の階につくと、ドアの前に出て待っていてくれた。

「ひさしぶりね」

おばあさんは、ほほえんでいる。笑うと遙によく似ている。理央も笑おうとしたが、ほおに力が入ってしまった。涙が出そうになるのをぐっとこらえる。

「あの……」

思いきって手袋をとった。

「これ、返しにきました」

やっと言って、にぎりしめた手袋を差し出した。

「遙が買ったばかりの手袋を貸してくれたんです。ずっと借りたままでした。ごめんなさい」

手袋が小刻みにふるえていた。

おばあさんはしばらくだまって赤い手袋を見ていた。理央はぎゅっと目をつぶる。あの日、遙の右手に同じものがあつたことは知っているはずだ。手袋を差し出したままうつぶす理央に、おばあさんは静かにきいた。

「本当によかと？」

(1) 理央はおおずと顔をあげた。そのとたん、⁽²⁾ 胸のいちばん奥にあるものが、きゅっとちぢまったみたいになった。そのせいで大きなすきまがぼかんとあいて、いてもたってもいられないほど心細くなってしまい、理央は顔をくちやくちやにした。

「無理せんでよかよ」

おばあさんは、手袋を差し出す理央の手ごと両手で包んだ。

「理央ちゃんが持つとってくれたらよか」

両手が小刻みにふるえはじめる。そのふるえを押さえるように、おばあさんは強く手をにぎってくれた。

「それより理央ちゃん」

しばらくそうしたあと、急におばあさんは声のトーンをあげた。

「タカ、飼っているのね」

「あ、はい」

「腕に乗せて歩いとるところを、ときどき見とったんよ。お母さんにもきいたけど、飛ぶ訓練をさせてるんてね」

「はい」

モコのことを遙に見せたいのだからと言おうとしたが、その前におばさんが言った。

「ちゃんと飛べるようになったら、おばさんにも見せてちょうだい」
理央は大きくうなづく。

「おばさんぜひ見に来て。絶対、高く飛ばすけん」
言い終わらないうちに、理央はかけだす。早く龍安寺に行つて、訓練をしなければ。

「楽しみにしとるわねー」
おばさんの声が耳に明るくひびいた。

今年が冬が早足で過ぎた。三月に入ると風がやわらかくなり、かすかに花の香りも混じるようになった。龍安寺の裏山では、気の早い竹の子が頭の先を土から出し、春の訪れを待ちわびているようだ。

遥のお母さんに、モコの飛ぶ姿を見せると約束してから、理央は訓練にいつそう力を入れはじめた。

それまで空に放つのは、平橋さんから教わったとおり週一回だったのが、これを週二回に増やした。たとえ短い距離でも蓄積が大事だと考えたからだ。一流のアスリートたちでも一日練習を休むと、筋肉が戻るまで四日はかかることだがある。一度飛んで得た体感を忘れないうちに、新しい体の使い方を覚えなければ、進歩はないだろう。それでなくてもモコは遅れている。ほかの鳥の倍やっても、追いつかないと思えた。飛ばさない日は、ジャンプ台を使ったジャンプアップの訓練をかかさずやる。

けれど、訓練はうまくは進まなかった。半月ほど前は、裏山の雑木林よりも高いところを飛んでいたのに、このところ本堂の屋根までしか飛ばなくなつた。進歩どころか、後退しているように感じる。ジャンプの回数も増えないし、飛行高度もまったくあがらない。

今日も屋根のへりまで届くと、目的地はそこだと決めているように、さっさと羽を休めてしまった。

「モコっ、もう一回」
理央は屋根を見あげて、「ピッ」と笛を吹いた。モコははばたいて、すーっと腕に戻ってきた。

「あんたタカでしょ。もつとちゃんと飛ばんと」
腕に乗せたモコに強く言いよらせる。もう一度、笛を吹く。

「ピッ」

モコは飛び立った。が、やはり屋根までしか届かない。

「モコっ、だめでしよう」

理央はつい声を荒らげた。

「理央ちゃん、モコちゃんは疲れとるんじゃないかと？」

訓練につきそっている舞子が、案ずるように屋根を見あげた。

「モコちゃんには、まだ空まで飛ぶのは無理なんやない？」

その言葉が、カチンと理央の心につかかった。モコに力がないと言わんばかりの言い方だ。

うちのモコに。

理央は顔を(3)。

「そんなことないよ。モコは正真正銘のタカなんよ」

本来タカは、山の上の空も飛べるし、海だって渡るほどの能力がある。舞子はなんにもわかっていない。

「ピッ」

理央は舞子にかまわずモコを腕に戻した。が、腕に戻ったモコはえさをくわえると、逃げるようにはばたいて、そばの止まり木に止まった。

「モコっ」

理央はつかつかとなる。

「だめでしよう。訓練中は、腕の上で食べるんでしょ」

「よかやん。ごはんくらいゆつくり食べたいよね」

舞子はご機嫌をうかがうように、モコをのぞきこんだ。その言い方があてつけがましくひびき、理央は、むしろしゃとグローブをはずした。

(4)「舞子はなんにもわかつとらんとよ。タカをしつけるのは、えさやりのときが大事な。腕に乗せて、だれからえさをもらつとるのかしつかり覚えさせんと」

「でも、モコちゃんはいやがとるやん。いやがとるのに、かわいそかよ。ねー、モコちゃん」

舞子はモコの頭をなでようとした。

「だめっ」

理央がさげんだので、舞子はびくつと体をふるわせた。

「頭をなでたら野性を失う」

硬い声が出た。でも本にそう書いてあった。野性を失うとよいタカにな

らない。モコがうまく飛べないのは、長いことベットショップにいて、野性が育っていなかったからだ。やっと少し野性が目覚めて、飛ぶことを覚えたのに、訓練中にあまやかしたらふり出しに戻ってしまう。

「ごめん」

舞子は、出した手を引っこめた。

「なんもめようとやー」

のんきに言いながら、⁽⁵⁾康太が歩いてきた。ふたりのあいだの険悪な空気を感じて、しよざいなさげにほほえんでいる。その笑顔^{えが}さえ、理央には腹立たしかった。

「康太には関係ないよ」

理央はむっとしたまま答える。

「それはないっちゃない。上田君だって、モコちゃんの世話をしとるとに」
さとすような舞子の反論を、とがった声で理央はささえざる。

「でもモコのことをいちばん知ってるのは、わたしやもん。モコは今が大
事なの。なるべく若いうちにしこまんと、いいタカにはならんとよ。ただ
でさえ、モコは出遅れ^でとるんやから。もう、口出しせんどって」

「……わかったよ」

舞子は顔をゆがめて、走っていった。

「あーあ、怒^おらせた」

康太はその背中と理央を、首をすくめて見くらべた。

「だって、どうしてもモコを高く飛ばせたいっちゃもん」

理央はいらいらとグローブのなかに手をつっこもうとした。それを康太
がさっと取りあげた。

「ちよっと貸してね」

勝手にグローブをはめて、モコのほうに腕を差し出す。

すると、モコは待ってましたとばかりに、ひょいと康太の腕に乗った。

「よしよし」

逃げ場を求めたモコにも、満足げな康太にもますます腹がたち、理央は
小さく舌打ち⁽⁶⁾をする。

「あせるな」

康太は言った。力のこもった強い声だった。

「おまえがあせっていらしたら、遙⁽⁷⁾だって喜ばん」
理央ははっと顔をあげる。

155

150

145

140

135

130

125

「それに」

康太は悟^{さと}ったように遠くを見つめ、重々しく告げた。

「タカだったまには休みタカ」

ひざの力がかくんと抜けて、理央はその場に座りこみそうになった。

(まはら三桃『鷹のように帆をあげて』)

★おばあさん：鷹の飼育場所の龍安寺で、理央のはめている手袋をみて、

突然^{とつぜん}声をかけてきた女性。

問一

——(1)「理央^{りお}はおずおずと顔をあげた。」とありますが、その理由とし
てふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おばあさんのほほえんだ顔は遙^{はるか}によく似ており、見ていると思いで
して涙^{なみだ}が出てきそうになるので、顔を上げるのがつらいから。

イ 遙の手袋^{てぶくろ}を長い間借りたままにしていた自分に対して、おばあさん
が怒^{おこ}っていると思ったのに、思いがけない反応^{はんおう}だったから。

ウ 遙の赤い手袋をしばらくだまて見ていたおばあさんの心中は、悲
しみでいっぱいであろうと推測^{すいそく}されるため、顔を見ることができ
なかつたから。

エ 遙の手袋を長い間借りていた理由をきちんと説明していないこと
を、おばあさんが怒^{おこ}っているのではないかと思つたから。

問二

——(2)「胸のいちばん奥^{おく}にあるものが、きゅつとちぢまったみたいにな
った。そのせいで大きなすきまがぼかんとあいて」とありますが、
この時の理央の心情としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ
選び、記号で答えなさい。

ア 遙が亡くなったときにはあまり感じなかつたが、手袋を返すこと
になってわき上がってきた深い悲しみ。

イ 手袋を家族へ返そうと思ひながらふみきれずにいたのに、周囲に
流され無理に心の整理をしてしまった自分へのふがいなさ。

ウ 自分と共にあつた左手の手袋が、遙の家族へと返すことによつて自
分のもとから離^{はな}れてしまうことによる深い悲しみ。

エ 手袋を返すことに迷ひがあつたが、気持ち奮^{ふる}い立たせて迷ひを
断^たち切り立ち向かおうという悲壮^{ひさう}な気持ち。

問三

(3) に入る語としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ほころばせる イ くちやくちやにする
ウ こわばらせる エ ゆがませる

問四

(4) 「舞子はなんにもわかつとらんとよ。」とありますが、理央と舞子とは鷹の飼育に対して考え方の違いが見られます。その違いを、七十字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問五

(5) 「康太」の性格について、あてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で選びなさい。

- ア 物事を深く考えないように見えるが、周囲をなごませ、意固地になつた心をほぐすことのできる少年。
イ 大らかにのびのびと育ち、周囲の人のささいな人間関係などは気に留めない少年。
ウ 物事を深く考えないようだが、物事の本質を見抜いておりの確なアドバイスができる少年。
エ 場の空気を読むことができ、周囲をなごませることができる大らかな少年。

問六

(6) 「舌」とありますが、「舌」を使った次の一～五の慣用句の意味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 舌が回る
二 舌先三寸
三 舌の根が乾かぬうちに
四 舌を巻く
五 舌を出す

【意味】

- ア その言葉を言い終わらないこと。
イ うわべばかりのことをいうこと。
ウ 非常に感心すること。
エ よくしゃべること。
オ 陰で相手をばかにすること。

問七

(7) 「理央ははつと顔をあげる。」とありますが、その理由を六十字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 理央が眠るときも手袋をはめているのは、遥から借りたもの身につけていることで遥を失った悲しみがおのずと埋められ心の安定が得られるからである。
イ おばさんがしばらくだまって赤い手袋を見ていたのは、なぜ今頃になって返しにきたのか図りかねていたからであり、本当は一刻も早く返してほしいと思っていた。
ウ 理央はおばさんに鷹が高く飛ぶ姿を見せる約束をしたことで新たな目標ができ、その後も明るく、前向きな気分で訓練に取り組めるようになった。
エ 理央が鷹を空高く飛ばす訓練に打ち込んでいるのは、手袋をおばさんに返せなかった負い目をまぎらわそうとして心の安定を図っているからである。

